

17 踊り手もミュージシャン カスタネット フラメンコの小物その2

フラメンコを最初に観た時、印象に残るのは音ではないでしょうか。しわがれ声の歌、かき鳴らされるギター、そしてものすごいスピードで複雑なリズムを刻む手拍子と靴音。指を鳴らし、体を叩き、とフラメンコの舞台にはたとえ、踊り手と歌い手ギタリスト3人だけの舞台でも様々な音が溢れています。中でもびっくりさせられるのがカスタネットの妙技です。

どのフラメンコ公演でも使われるというわけではなく、また、最近では日本でもカスタネットを教えない教室も多いようです。スペインでも全てのフラメンコダンサーがカスタネットを使って踊れるかという、そうでもなく、苦手な人もいます。でもカスタネットはフラメンコとは切っても切れない楽器なのです。

カスタネット／パリージョ

カスタネットと言うと、日本人なら幼稚園や小学校で誰もが一度は手にしたことがある、青と赤の小さな木製のものを思い浮かべてしまうと思うのですが、フラメンコの舞台のカスタネットは、それとは全く違います。同じ名前でも子供と大人ぐらいに違います。フラメンコで使うカスタネットは、より大きく、円に取っ手がついたような帆立貝に似た形で、円の内側にはくぼみがあります。取っ手の部分に紐を通す穴が二つ空いていて、2片をつなげて使います。2片2組が1セットで、穴のそばに切れ込みの目印が付いている音程が高い方をエンブラ(雌)、付いてない、音程が低い方をマチョ(雄)といい、エンブラを利き手に、マチョを違う方の手に持ちます。紐を親指に通

し、カスタネットをぶら下げのような感じで持ち、それを指で叩くことで音が出ます。なお、フラメンコではカスタニエラスよりもパリージョとよばれることが多いですが、同じ物のことです。かつてはグラナデージョなど木製のものが主流でしたが、現在は紙片を樹脂加工したフィブラ(ファイバー)素材が主体です。土産物屋にあるものではない、プロ用はサイズもあり、また音色も微妙に違うので購入するときは試奏させてもらって選ぶのがいいでしょう。

カスタネットの起源 チンチネス／クロタロ

カスタネットの起源については諸説あります。クロタロとよばれる、アラブ支配下のイベリア半島で、儀式や祭典で使われていた金属製のフィンガー・シンバル(チンチネスともよばれます)が起源だという説、ローマ時代に入ってきたクロスマタという楽器に由来する、という説もあります。2枚の木片、金属片を打ち合わせることで音を出す楽器というのは中国や日本など世界に広くみられるものですが、スペインのカスタネットはそれが最も進化



アントニオ・マリア・エスケベル・イ・スアレス、デ・ウルピナ「ボレロ舞踊」マドリード 国立ロマンティシズム美術館所蔵
 1830年頃に描かれたこの絵でもカスタネットを持って手拍子とギターの伴奏で踊っているのがわかります。



アントニア・メルセ「ラ・アルヘンティーナ」
 1929年初めて日本を訪れたスペイン人舞踊家ラ・アルヘンティーナはそのカスタネットでニューヨーク、パリなど世界中を虜にしました。



カスタネットでシギリージャを踊るローリ・フローレス。©Remedios Málvarez, 2011。
最近ではスサーナ・カサスやルシア・カンピージョも踊っていたのでは？ 男性でもルイス・オルテガラが踊っています。

した形とっていいでしょう。フラメンコが誕生する前からの長きにわたって、カスタネットはスペインに舞踊とともにあるのです。ホタのような民族舞踊でも使われていますし(中指にはめて鳴らすなどの違いはありますが)、18世紀にスペイン全土で流行したセギディージャ(シギリージャとは違う曲です)やそこから生まれたボレロ(ラヴェルのボレロはそれに想を得て作曲されたものです。スペイン舞踊のエスクエラ・ボレーラの原点ですね)にもカスタネットはつきものでした。その影響を多大に受けているフラメンコでも、カスタネットは今に至るまでよく使われるのです。

カスタネットを使う曲

スペイン語で, alegre como unas castañuelas カスタネットのように楽しそう、などという言い方がありますが、カスタネットにはお祭りのイメージがあるのかもしれません。セビージャのタブラオのフィナーレで踊り手たちがカスタネットを鳴らしてのセビジャーナスを踊るのを観た人もいでしょう。セビジャーナス、ファンダンゴス・デ・ウエルバなど民謡系の曲でカスタネットを使うことはよくありますね。

セビージャのフェリアでもカスタネットを叩きながら踊ると地元の人からも尊敬の目で見られます。またもう一つの定番がシギリージャ。女性が後ろの裾を長く引いたバタ・デ・コーラをまわってカスタネットを奏でながら踊るシギリージャは、フラメンコの舞踊の中でも最も見応えのあるものの一つでしょう。その他ではあまり使われなことも言いますが、アレグリアス、ソレアやカーニャ、グアヒーラ、プレリアと言った曲でも使われることはあります。日本にやってきた最初のスペイン舞踊家ラ・アルヘンティーナはカスタネットでタンゴを踊っている動画がありますが、日本でもタンゴを踊ったそうです。

カスタネットの名手

SPレコード時代のラ・アルヘンティーナに始まり、多くの踊り手たちがその妙技を録音に残してきました。踊り手の名前前で録音が発売される舞踊というのもあまりないのではないのでしょうか。フラメンコの踊り手は踊るだけでなくカスタネットという打楽器を演奏しているミュージシャンでもあるのです。カスタネットの名手とってまず名前があがるのはルセロ・テナはな

いでしょうか。もともとはメキシコ出身の踊り手ですが、カスタネットで有名になり、カスタネット教則のレコードも出しており、踊り手として引退してからも、オーケストラとの共演でその妙技を聴かせています。男性ではホセ・アントニオの音へのこだわりが印象的ですが、スペイン国立バレエの元第一舞踊手で現在リハーサル監督を務めるマリベル・ガジャルドも素晴らしいカスタネットを聞かせます。マリア・パヘスやアントニオ・ナハロもその作品の中でカスタネットを効果的に使っています。スペイン舞踊系の踊り手ばかり？と思われた方はぜひ、カルメン・アマジャのカスタネットを聴いてみてください。



2000年のシカゼ
ピセンテ・アミーゴの通訳で日本へ。ピセンテとは何
度も仕事しましたが、とにかく集中力がすごい。チス
テ(小囃)ばっかりのオフとオンとのギャップもすごい。

志風恭子/1987年よりスペイン在住。セビージャ大
学フラメンコ学博士課程前期終了。パセオ通信員、
通訳コーディネーターとして活躍。パコ・デルシアを
はじめ、多くのフラメンコ公演に携わる。